

2026年1月29日取材

福岡県

産地レポート

リーフレタス

J Aくるめの主力葉物リーフレタス
出荷量の多いメインの冬どりで特性を発揮する

アイスルージュ

(編集部)

J Aくるめのリーフレタス

当地のリーフレタスはレッドリーフとグリーンリーフがありますが、ともに夏場以外ほぼ周年で栽培されています。レッドリーフは播種時期別に5品種が使い分けられ、作型を細分すると約17作型に分類されます。

一番早いスタートは、7月25日まきの晩抽種で9月10日ごろからの出荷をねらう作型です。白黒ダブルマルチを使った4条植えて地温の抑制が図られます。8月中下旬まきからは黒マルチに切り替わり、9月20日までの播種作型で年内どりが終わります。

9月上旬から10月下旬播種で11月下旬〜2月末まで冬期に収穫をする作型では、従来品種に加えて「アイスルージュ」が好評です。その理由は後ほど播種は続きますが4月15日まきの6月上中旬どりまでとなっています。冬期はトンネル被覆がされますが、12月上

久留米市は福岡県の南部、筑後平野に位置し、福岡市からは約40km、市の北東部から南西部にかけて筑後川が流れています。全体的に東南の山麓・丘陵地から、西北から西部にかけて緩やかに傾斜し、筑後川によって形成された広大な沖積平野の平坦地に続いています。気温の年較差や降水量の年変化が大きいものの雪は少なく、温暖で四季の変化に富んでいます。

久留米市の農業は農業産出額で福岡県第1位、野菜生産が盛んで全国的にも上位を誇ります。J Aくるめ園芸品目として、イチゴが知られていますが、野菜では16部会が存在しハクサイやキャベツ、シロウリなどの栽培も盛んです。中でも野菜販売額のトップのリーフレタスは面積延べ220ha、90万ケースの出荷量を誇り、販売額は12億円を達成する稼ぎ頭で、リーフレタス部会は68名の部会員が所属しています。京浜市場から九州まで各市場20社へ全国的に出荷されています。

※J Aくるめは2026年4月、J Aにじ・J Aみいと合併により「J A福岡くるめ」となりました。

旬から被覆され、年明け以降の収穫分は3月の植え付けまでは必須となっています。

「アイスルージュ」は
さび症に強い

端境期収穫をねらう早まきや、春まきは特殊な作型ですが、中心となる作

地域概況





←
100mの畝でトンネル栽培。



↑生育中の「アイスルージュ」。サイドと中央で生育差が少ない。冬期は黒マルチの4条植え。10a当たりの栽植数は8400株が目安。



↑立性で3×5の箱詰めもしやすいと好評。



↑「アイスルージュ」を収穫する平塚さん。

型は9月上中旬〜10月中旬まきの12月〜2月収穫の冬期作型となります。「アイスルージュ」はこの間の栽培安定や収量増をねらうために試作がされてきました。

J Aくるめ営農事業部でリーフレタスの指導販売を担当する中島眞志さんが案内してくださったのは管内の生産者、平塚健作さんです。平塚さんが「アイスルージュ」を試験されたのは2年前で、亡くなられた父、英敏さんとメインの冬どりに適する品種として手掛けられました。英敏さんはリーフレタスを当地で最初に取り組まれた一人。当地ではトンネルを使った春ダイコン栽培(品種は「耐病総太り」)発祥の地だったそうですが、時代とともにダイコンは減少し、代わりに導入されたのがリーフレタスとのこと。導入当時はトンネルの素材にポリエチレンがなく塩化ビニールだったため、「葉が焼ける」ことに苦労されていたそうです。

平塚さんが「アイスルージュ」を使うメインの作型となるのが1〜2月どりの従来品種と比べ評価できる点を聞いてみると、「急な温度変化でもさび症の心配が少ないことですね。外皮に筋が出ないので、裂皮の発生が見られずそこから変色する心配がありません」という特長が大きな決め手でした。従来品種は裂皮が悩みで、現地で「茶スジ」と

いわれるさび症が発生すると、症状が出た葉は極力落として出荷されます。

圃場での検品に時間がかかり作業性を落とす要因になるほか、通常よりも大きめに栽培して下葉を落とす必要があるため、さび症が出ないことが「秀品率+作業性」の向上につながるわけです。

さらに、「アイスルージュ」は「通常、4条植えでは両サイドの生育が遅れがちで、中の2条から収穫せざるを得ないのですが、両サイドでも株張りがよく4条そろって重さが出る」という生育ぞろいのよさも利点です。また、「生長が早まる春先の色付きもよく差が出ない」と、トンネル栽培でのばらつきが少ない特性が評価されていました。

圃場での収穫、箱詰めの際にも立性で切りやすく、1ケース3×5個人に詰める時間が早まったと、グリーンリーの畝で実際に箱詰め作業をしていた平塚さんのお母様が話しかけてくれました。「アイスルージュの方が箱詰めが早いよ」といって、鎌を差し出し私に収穫を体験させてくださいました(不器用な私では違いが分かるかどうか…)。

春先はトンネル管理が重要

平塚さんにリーフレタス栽培で気を遣うことを尋ねると、「トンネルの開

け閉め」だと即答でした。

「換気のタイミングは常に注意しています。トンネル内に水滴が見えれば片側のトンネルサイドをまくり上げ、水滴が大きければ両サイドを上げます。上げ方は山型にジグザグが基本です」

この作業が大変で、霜が降りる時期は夜から朝にかけてサイドを閉め、温度が上がる日中は上げる作業の繰り返しだそうです。一方この上げ下げの加減で、生育を急がせる場合は閉め込んでも、収穫が重なり作業が追いつかなくなると開閉して時期をずらすというように、天候の先読みと生育を見極める経験が必要です。そんな管理作業に追われる平塚さんにとって、生育に差が少なく、作業性のよい「アイスルージュ」は経営の十分なサポートになっています。



↑平塚さんと(右)とJ Aくるめの中島さん(左)。福岡県内のJ Aにじ、J Aみいとを2026年春に控え(取材時)、久留米の重要品目リーフレタスの販売力向上に期待も高まる。